

ティーチングポートフォリオ

山村学園短期大学 子ども学科

専任講師 巢立佳宏

1. 教育の責任

2020年度の担当科目は（表1）の通りである。

（表1）2020年度 担当科目詳細一覧

科目名	学期	対象学年	種別	受講数	備考
キャリアアップ セミナー		1年	演習	18名	1クラス
保育入門	後期	1年	演習	20名 高校生	1クラス 高大連携
社会的養護	後期	1年	講義	73名	4クラス
保育の心理学	前期	1年	講義	73名	4クラス 教員2名
乳児保育	前期	1年	講義	73名	4クラス
保育・教職実践演 習（幼稚園）	後期	2年	演習	66	
基礎演習	通年	1年	演習	18	4クラス 教員4名
実習指導	前期	1年	演習	73	4クラス 教員5名
実習指導	後期	1年	演習	73	4クラス 教員5名
実習指導	前期	2年	演習	66	4クラス 教員5名
保育実習	集中	1年	実習	73	4クラス 教員2名
施設実習	集中	1年	実習	73	4クラス 教員2名
施設実習	集中	2年	実習	66	4クラス 教員2名
教育実習	集中	1年	実習	73	4クラス 教員2名
教育実習	集中	2年	実習	66	4クラス 教員2名

2. 教育の理念

私が以下の3つのキーワードを教育の理念としている。

(1) 実践現場へつなげる授業

私は子育て支援センターの保育士、児童養護施設の心理士、小学校のカウンセラー、市の教育委員会における巡回相談員など、様々な現場に勤務してきた。しかしながら勤務する中で、知識として理解していても、現場においてはうまく立ち回れず、自身の力不足を感じるが多かった。

この経験から、実際の現場においては単に知識を有しているのではなく、いかに知識を活用し、柔軟に対応していくかが必要であることを感じた。そのため、保育士幼稚園教諭養成校での教育を実践現場における子どもへの保育・教育に結びつけていくことは意義がある。授業において学生がよりよく理解できるよう具体的な事例を多く用い、様々な子どもへの対応を学生自らが考える授業を展開している。

(2) 保幼小および地域との連携

私は保育園や幼稚園、小学校、中学校、放課後等デイサービス、児童養護施設、適応指導教室など様々な場所で研修会や事例検討会を行ってきた。そうした中で、多く課題として挙がっていたのが、『情報共有』、『外部機関との連携』である。保育士や教員の多くは非常に熱心で子どもへの対応にはすさまじいエネルギーを有している。一方で、バーンアウトしてしまう保育士、教員も少なくない。

子どもや保護者への支援や援助に困ったときにどのような機関と連携し、問題に立ち向かっていくのか、学生の内から学んでおくことは非常に意義がある。保育士として勤務した後、離職する者も少なくはない。そのため、大学において保育士が様々な社会資源を活用し、外部機関や地域と連携するための保育・教育について伝えている。

(3) インクルーシブ保育

発達障害というワードが近年、保育・教育現場だけでなく社会的に話題となっている。私は発達障害を有する、または疑われるような子どもに数多く携わってきた。子どもに対して遊戯療法や箱庭療法などのカウンセリング、ソーシャルスキルトレーニングなど様々な方法を用いて、子どもが保育園や小学校など社会性の求められる場で生活しやすいよう実践してきた。

私はこの経験を学生たちに伝え、保育現場で障害を有する子どもたちが生活しやすい社会を実現したい。そのため、学生のうちから発達障害について具体的に理解し、どのような保育・教育を行うべきか学べるような授業を実践している。

3. 教育の方法

(1) アクティブ・ラーニング

私は様々な現場での子どもや保護者、保育士、教職員の方々から学んだことの事例を用いて授業を行っている。例として、実際の事例を加工、修正したものや映像教材などを用いて、学生一人一人が保育士の立場から、どのような対応を行うか考える授業を展開している。授業の講義で得た知識をどのように実践へ落とし込むか実践している。

こうした問題を解く中で、答えが一つであるとは限らない。そのため、学生と教員の双方向対話型授業を展開している。具体的には事例問題の解答を学生たち数人にマイクを手渡し、発表してもらう。そうして多種多様な対応があることを理解してもらう。また、ステージ上にてロールプレイを行い、視覚的にも理解しやすいよう努めている。特に心理学の実験などをステージ上にてロールプレイを行い説明すると、多くの学生から「理解しやすかった」と授業の感想をいただいた。

(2) 授業の工夫

授業を始める際には、必ず前回の授業の復習を行っている。前回の配布プリントから問題を作成し、学生たちに前回の授業のポイントについて質問する。双方向型授業を毎回実践している。集団の場の中で発表することが苦手な学生もいるが、問題を簡単にすることに加え、近くに座る学生が手助けするよう周知しているため、発表しやすい環境を整えている。

また、具体的な資料や映像を盛り込み、学生の好奇心や学習意欲が持続するようにしている。授業で学んだことがどのように実践で活かせるのかワークシートを活用し、学生一人一人が考える力を身に付けられるような取り組みを行っている。その他に実習などで必須のスキルとなるおむつ替えに関しては実際に人形を用いて学生たちの前で実践し、理解しやすいような授業を展開している。

虐待などの社会的な問題については学生たちの学ぶ意欲が高く、虐待を予防する使命を保育士が担っていることを事例などから理解できるよう説明している。

事例を通して学ぶことで、学生が実際の現場に出た際、どのような対応をするべきかだけでなく、知識として今何を学ぶべきか考えられるような授業を展開するよう心がけている。

4. 教育の成果・評価

乳児保育 の公開授業において、他の教員から「『保育園における感染対策』について 手洗い おむつ交換 嘔吐時の処理、等を動画を用いて教授する内容であった。動画を観ることで、具体的に保育の現場を想定でき、1年生前期にこのような授業を受ける意義は多い。」とコメントをいただいた。

5. 教育の改善に向けた今後の目標

(1) 短期的目標

具体的な事例、ロールプレイ、視覚的教材など様々な方法を用いて、学生がより意欲的に興味を持って授業に取り組めるよう取り組んでいく。

(2) 長期的目標

実習の重要性

実習は学生にとって授業で学んだ知識を実践の場で活かす重要な機会である。授業内での実践を学生たちがどのように活用していくか教員が理解を深め、伝えていく必要がある。学生一人一人について理解を深めていき、指導案の作成や責任実習などきめ細やかな指導を行えるよう努めていく。

学生に還元するための研究

私はこれまでの現場経験を学生たちに伝えていくとともに、保育現場でのフィールドワークなどを通して、保育現場での実践や保育現場で求められる大学教育について研究という視点から理解を深めていきたい。

保育現場の状況は日々変化している。時代のニーズに応じた保育士を養成していくためには、現在の実践の場における保育について教員が理解し、学生たちに伝えていく必要がある。

社会の一員としての成長

学生は大学を卒業後、保育士として自ら考え、行動していかなければならない。その基盤となるのは大学での学びである。そのため、現在の学びをどのように現場の中で活かすか理解することが重要である。また社会においては社会的なコミュニケーション力や自身の長所を活かし、短所を補うなどの必要性も出てくる。単に保育士を養成するのではなく、一人の人間として社会で活躍できるような人材を養成していくことも教員の責務であると考え。そのため、学生が社会の一員として、立派に活躍できるよう手助けしていきたい。

6. エビデンス一覧

- (1) 各科目シラバス
- (2) 授業時配布プリント
- (3) 試験問題
- (4) 成績集計結果
- (5) 公開授業アンケート結果

以上